



一人の答えを大きく表示したり、複数の意見を一度に表示したりできます。先生の手元を拡大して映すという活用方法も。



特集 広がる 変わる 学びの場

大型モニターで共有

キーボードでのローマ字入力のほか、手書き入力や音声入力も可能。個々の学習から、調べ学習、話し合いの時間にまで幅広く活用されています。



タブレット端末は一人一台



<< 次ページでは実際の学びの場の様子を紹介しています

市では、^{キガ}GIGAスクール構想を推進し、学校などで情報通信技術を積極的に活用しています。大きく変わりつつある学びの場について紹介します。
問合せ／総合教育研究所(☎244-1331)

GIGAスクール構想

今、私たちの生活のあらゆる場面で、人工知能(AI)やビッグデータ(※1)などが活用されており、今後、情報通信技術はさらに高度化していくと考えられています。そのような社会を生き抜いていく児童・生徒の可能性を広げるため、学びの場にも情報通信技術を取り入れる——それがGIGAスクール構想(※2)です。

市では、この構想に基づき、すべての市立小・中・義務教育学校で、一人一台のタブレット端末(※3)、校舎内の高速大容量の通信環境、普通教室への大型モニターなどの整備を行いました。これらは、新型コロナウイルス感染症が拡大する中でも、児童・生徒の学びを継続するため、当初の計画よりも前倒して実施。令和3年6月から本格的な運用が始まっています。

教室をのぞいてみるよ

令和3年度、学びの場は大きく変わりました。机の上には教科書やノートだけでなく、タブレット端末があります。また、黒板の脇には大型モニターもあります。多くの市民の皆さんにとっては、なじみのない光景かもしれませんが、しかし、児童・生徒にとって

は、日常的な学びの環境となりつつあります。

学びを止めない

新型コロナウイルス感染症の拡大により登校できない期間にも、タブレット端末を活用しています。児童・生徒はタブレット端末を自宅に持ち帰り、朝の会や授業をオンラインで実施。家にいながら、担任の先生やクラスの仲間とつながることができます。

宿題などに活用するため、通常どおり登校している時もタブレット端末の持ち帰りを行っている学校もあります。また、学校に行くことが難しい児童・生徒がオンラインで授業に参加している例もあります。

※1…情報通信技術の発達により収集・蓄積が可能となった多種多様な膨大なデータのこと。有効活用することにより、新たなサービスの提供や業務の効率化、新産業の創出を図ることができる。

※2…Global and Innovation Gateway for All(すべての児童・生徒のための世界につながる革新的な扉)の略。一人一台端末と高速大容量の通信環境などを一体的に整備することで、学びの場で情報通信技術を活用できるようにする。

※3…現在導入しているのは、11.6インチのHP社製Chromebook。キーボード、カメラ付き。



海外の講師とつながる

タブレット端末に向き合う双葉台中学校の生徒たち。英会話の授業ですが、隣の人とは言葉を交わしません。実は、タブレット端末をとおして、それぞれが海外の講師とつながり英語で会話しています。同校では、オンラインで海外の講師と英会話ができるツール(※)を試験的に導入し、授業に取入れました。

ひとりひとりが進度や興味関心によって内容を選択し、自分のペースで学習できます。同校2年生の倉塚遼さんは長文の音読などを練習。「海外の講師と直接話すことができ、ネイティブな発音を学ぶことができた」と話します。同じく2年生の磯田未翔さんは「英語には苦手意識があったが、言いたいことが伝わって嬉しかった。共通の話題があったので楽しく会話できた」と笑顔で授業を終えました。

授業を担当する柴沼真紀先生は「テストや受験対策だけが英語の本質ではない。会話して相手に伝わったという成功体験が重要。英語が好きになる生徒が増えれば嬉しい」と新たな取組への期待を語りました。

※DMM英会話学校向けサービス。



(左から)柴沼真紀先生、磯田未翔さん、倉塚遼さん

進む働き方改革 一質の高い学びのために

「タブレット端末や通信環境の整備で、確実に教員の働き方が変わった」と話すのは、浜田小学校の萩谷孝男校長です。同校では、AIドリルなどを積極的に活用しているほか、保護者向けの手紙もデジタル化しました。野口博江先生は「ノートやプリントの配付・回収作業が少なくなり助かっている」と授業時間中の負担も軽減されたと語ります。「黒板に答えを書かせる時間が減り、子どもたち

が考える時間を増やすことができた」と話すのは小瀧綾子先生。以前より授業時間を有効に活用できていると感じているそうです。

さまざまなソフトや教材があり、教員が児童のためにできることは格段に増えました。萩谷校長は、今後を見据え「学びの質の向上と作業の効率化を両立させるため、より良い活用方法を模索し続けたい」と話しました。



算数の授業。自分のノートをタブレット端末で撮影してデータで先生に提出。大型モニターに提示して共有する



(左から)小瀧綾子先生、萩谷孝男校長、野口博江先生

宿題もタブレット端末で

新荘小学校の児童たちは、タブレット端末を自宅に持ち帰って、宿題などに使っています。同校では、令和3年6月から順次、紙の漢字ドリルや計算ドリルに代えて、タブレット端末を使うAIドリルを導入しました。AIドリルの特徴は、その児童の学習状況に応じた難易度や内容で出題されることです。

同校3年生の延島咲葵さんは、ドリルが紙からタブレット端末になっても、すぐに違和感なく使うことができたといいます。むしろ「画面を拡大表示できるので、画数の多い漢字も書きやすい」「先生に丸付けをしてもらうまで待たなくても、すぐに正解か不正解か教えてくれる」などの点で気に入っています。また、書き順が間違っていると不正解になるため、漢字を正しく覚えるのに役立っているそうです。

母親の延島明子さんは「たくさん質問されるかと思ったが、子どもだけでしっかりできた。私がしたのは通信環境の設定くらい」と話します。多くの児童が、タブレット端末という新たな道具に慣れ、学びのために活用しています。

延島咲葵さんと母親の延島明子さん▶



学び合いがより活発に

考え方や答えをみんなで共有する学び合いの時間は、多くの学校で大きく変わりました。大型モニターには、資料や映像はもちろん、各班で話し合いながら作成したデータなども表示されます。回答をまとめる際には、ひとつのデータを班全員が同時に編集できます。

第二中学校の長谷川響先生(右上写真)と宮下拳先生(右中写真)は「紙と比べると多くの画像や映像などを準備できるので、ひとりひとりにあった資料を提供できる」「データとして残るので、調べ学習の過程まで確認できる」と手ごたえを感じています。また、生徒たちにとっても、意見を言いやすくなるなどの良い効果がありました。

大型モニターで見ると、他の班の意見が分かりやすい

手を挙げるのが苦手な人も意見を言いやすくなった



(左から)第二中学校1年生の田添七瑚さん、石井希歩さん、高島茉衣さん、同校2年生の武田直樹さん、黒澤達喜さん



同時編集機能を使って発表用資料を作る様子(新荘小学校)▶